

大学剣道部員は剣道を どのように考えているか？ —イメージ構造の比較—

新里知佳野*・古澤伸晃*・

八木沢誠*・軽部幸浩*・藤田主一*

How Did University Kendo Club Members Consider “KENDO”?
—Comparison of Various Image Structures—

Chikano SHINZATO*・

Nobuaki FURUSAWA*・

Makoto YAGISAWA*・Yukihiko KARUBE*

and Shuichi FUJITA*

The purpose of this study is to examine the psychological structure of “images of KENDO” in university Kendo club students. This study included 235 subjects (89 male, 146 female), who were asked to write the 10 sentences that came to mind after the phrase “Kendo is” on a questionnaire. Of those sentences, they were asked to choose the one sentence evoking the strongest image of Kendo. Text mining of selected sentences extracted words, and the relations between them were analyzed. Both male students and female students cited “disciplining the human character” and “training the mind” in their images of KENDO.

key words: images of KENDO, text mining, co-occurrence network analysis

問題と目的

全日本剣道連盟 (2020) によると、剣道は「剣の理法の修練による人間形成の道である」という剣道の理念を追求しようとするものである。この目的のため、これまで剣道の心理的側面や運動生理的側面、競技的側面について、多くの実証的研究が積み重ねられている (秋田・矢野, 2020; 坂本他, 2019; 田中・江口・伊藤・竹宮, 2004; 八木沢他, 2014)。

そこで、本研究は剣道の心理的側面を研究する一環として、剣道を日々稽古している剣道部員自身が剣道をどのように考え、またどのようなイメージを持っているのかを明らかにすることを目的とする。

方 法

(1) 調査対象者: Table 1 の通り、調査は東京都内の 8 大学に所属する剣道部員 235 名を対象に実施した。

Table 1 調査対象者の男女別内訳

	1 年生	2 年生	3 年生	4 年生	合計
男子	24 名	20 名	15 名	30 名	89 名
女子	36 名	36 名	42 名	32 名	146 名
合計	60 名	56 名	57 名	62 名	235 名

(2) 調査内容: 質問用紙は、フェイスシート (学年、年齢、性別など) に続き、Kuhn & McPartland (1954) が開発した 20 答法 (Twenty Statements Test: TST) に準じた手法を用いた。従来の TST では、「私は」という言葉に続いて下線が書いてあり、その下線の上に 20 通りの文章を自由に書き加えるというものである。本研究は、TST の「私は」のことは「剣道は」に置き換え、また 20 通りの自由記述を 10 通りとした。「『剣道は』のことは浮かぶ剣道に対するイメージを 10 種類記入してください。」という指示を与えた。本来の TST が 20 通りの記述から個人の内的世界を描き出すことを目的にしているのに対し、本研究は剣道に関わる多数の客観的側面を捉えるため、上記調査対象者への記述を 10 種類に設定した。

(3) 手続き: 調査は 2019 (令和元) 年 9 月~11 月の期間に、各大学の部活動単位で行われた。「あなたの剣道に対するイメージ (剣道から感じるもの) について 10 通りの文章 (例: 剣道は○○である) を書いてください」という指示を与えた。なお、本調査は日本体育大学倫理審査委員会の承認を得ており、対象者に紙面に書かれている質問内容を口頭で十分に説明し、同意した者のみに調査用紙を配付し回答してもらった。

結 果

調査対象者の全体回答記述数は、1 年生 600、2 年生 560、3 年生 568、4 年生 613 であった。分析した結果を比較するのに際し、ここでは入学して約半年間経過した 1 年生と卒業を迎える 4 年生を取り上げて、3 年間の違いが剣道に対して抱いているイメージ構造に影響しているのか、影響があるとすればその質的な方向性をまとめた。

回答内容は、テキストマイニングソフト (KH Coder3) を利用して、抽出する語の最小出現数を 8 に設定し、分析を行った。Figure 1 は 1 年生 (男女計 600 文)、Figure 2 は 4 年生 (同計 613 文) ごとに抽出されたそれぞれの語句との関係について、Jaccard 係数が 0.2 以上 (この数値以上が強い関係を意味する) の語句だけで共起ネットワーク図を作成したものである。その結果、1 年生には 4 種類のネットワークが存在し、それは①「人間-形成-道」、②「礼儀-正しい」、③「日本-伝統」、④「鍛える-精神-強い」であった。また、4 年生には 6 種類のネットワークが存在し、それは①「人間-形成-道」、②「礼儀-正しい」、③「日本-伝統-文化」、④「鍛える-精神」、

* 日本体育大学

Nippon Sport Science University 7-1-1 Fukasawa, Setagaya-ku, Tokyo 158-8508, Japan.

⑤「奥-深い」、⑥「生涯-スポーツ」であった。1年生と4年生に共通した関係は「人間-形成-道」と「礼儀-正しい」であり、部分的に共通した関係は「日本-伝統」と「鍛える-精神」であり、前者は4年生に「文化」が加わり、後者は1年生に「強い」が加わっていた。なお、1年生と4年生に共通する9個の語句の出現頻度の総和を求め、SAS Studio 3.8 Enterprise Editionを利用してt検定を行なったところ、有意な差は認められなかった ($t(1211)=0.71, ns, d=.04$)。すなわち、1年生と4年生では共通する語句の数に違いのないことが明らかになった。

考 察

大学によって差異はあるが、春合宿を設ける中で新入生に対して稽古方法などの最初の指導が行なわれることが多い。また、併せて礼法指導、基本動作の見直し、高校と大学とのルールの違い、大学剣道部員としてのさまざまな心構えなどを教える。このような体験から、彼らの心身の中に剣道が持つ理念と技術が身に付いていくと思われる。

全日本剣道連盟(2020)の「段位審査の方法、称号・段級位審査規則」によると、初段・二段・三段は、①正しい着装と礼法、②適正な姿勢、③基本に即した打突、④充実した気勢の4点であり、四段・五段は、初段ないし三段の項目に加え、①応用技の錬熟度、②鍛錬度、③勝負の歩合の7点を剣道昇段審査の着眼点としている。したがって、4年生のネットワークに、「奥-深い」が存在しているのは、多くの4年生が、四段への昇段審査を受審するため、試合に勝つだけではなく、再び剣道を問い直す機会となっているためであると考えられる。また高校とは異なり、大学4年間の中で高段者と剣を交え、質の高い稽古を経験することにより、剣道の奥深さに触れ、「奥-深い」という結び付きが現われたものと考えられる。次に、「生涯-スポーツ」が1年生には見られず4年生の特徴として現れた。「剣道部員は、大学4年間で剣道が大学生活の一部であると考えている」と推察される。また学年が上がるとともに、下級生への指導的立場になることも増え、加えて目標達成に向けて全部員と切磋琢磨する。しかし、4年生も後半になると卒業後の進路を考える機会に直面し、積み重ねてきた剣道に対する目標の捉え方にも転換が求められる。ここでいう「生涯-スポーツ」という観点は、大学卒業後であっても「剣道を(生涯)続けたい」「厳しい稽古よりも(スポーツ)として剣道を楽しみたい」という認識の現れであろうと考えられる。

今後の剣道に関する研究は、本研究の結果を実証的に裏付けるために、1年生から卒業までの縦断的な調査や、部員1人ひとりにインタビュー形式の研究を行なうことで新たな知見が見出されることが期待できる。

引用文献

秋田裕太・矢野宏光(2020). 女子中学生が剣道授業に対して抱くイメージの変容：剣道未経験者を対象に剣道具を着けず木刀だけを用いて実施した場合 武道学研究, 52(2), 133-141.

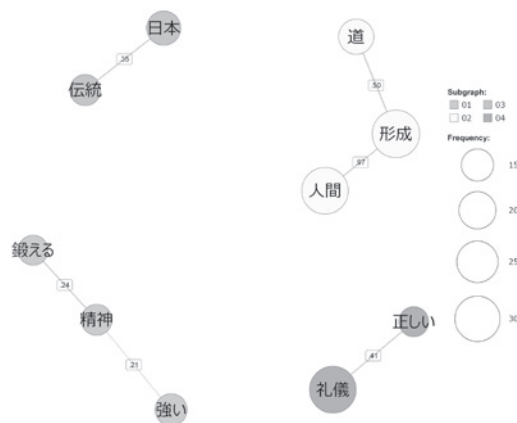


Figure 1 共起ネットワーク (1年生男女)

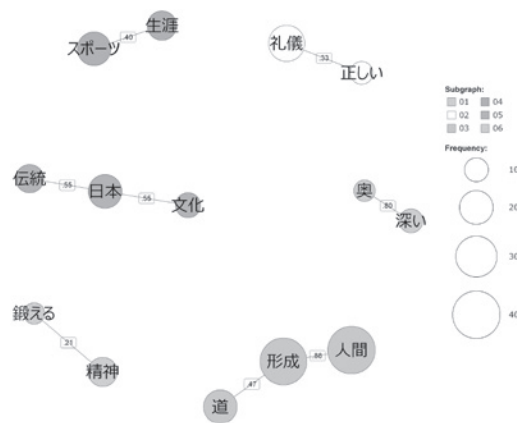


Figure 2 共起ネットワーク (4年生男女)

Kuhn, M. H. and McPartland, T. S.(1954). An empirical investigation of self-attitudes. *American Sociological Review*, 19 (1), 68-76.
 田中幸夫・江口和美・伊藤 孝・竹宮 隆(2004). 剣道熟練者の位置負荷及びイメージ負荷時の指尖容積微分脈波分析 体力科学, 53, 235-244.
 八木沢誠・新里知佳野・坂本太一・古澤伸見・向本敬洋・楠本恭久(2014). 剣道における審判員の注視点について 日本体育大学紀要, 43 (2), 27-35.
 坂本育未・有田祐二・鍋山隆弘・香田郡秀・小野誠司・木塚朝博(2019). 剣道の竹刀操作における男女比較 武道学研究, 51 (3), 161-171.
 全日本剣道連盟(2020). 剣道 <https://www.kendo.or.jp/> (2020年12月24日).

(受稿：2020.12.24; 受理：2021.2.11)